関西学院大学経済学部チャペルアワー「経済と人間」　2023 年 7 月 4 日

「百聞は一見に如かず：　ソビエト連邦旅行で経済を実感」

梶井厚志

一橋大学に入学した１９８２年ころ、私はレーニンのような革命家になりたがっていた。革命家になるには、大学でマルクス経済学を学び、理論武装する必要があると私は信じていて、マルクスやレーニンの著作を原書で読むのが大学での目標だった。それゆえ、大学の語学ではマルクス用にドイツ語、レーニン用にロシア語を学ぼうと考えた。

確か一橋大学の合格手続きの時に、必修の外国語として、どの言語を希望するのか申告する必要があった。このあたりの経緯をはっきりとは記憶していないが、革命かぶれしていた私は、おそらく深く考えることなく、英語を第 1 外国語、ロシア語を第 2 外国語として希望にしたのだろう。というのも、4 月に新入生として大学に行った初登校日、履修登録はおろか時間割もわからない時に、私は自分がすでにロシア語クラスに配属されていることを知ったからである。

当時の一橋大学は、学部を問わず 1 年生は第 2 外国語でクラス分けされていた。ロシア語クラスは、L2 クラス（２は 1982 年の 2）で、商経法社の 4 学部の学生 50 名がいた。このうち 10 名は中国語を選択していたから、ロシア語選択者は 40 名だった。L2 組以外にロシア語クラスはなかった。一学年は 950 名ほどだったから、ロシア語はごく少数派といってよかろう。

マルクスとレーニンのどちらから始めるか入学してから考えようと思っていたから、すでにロシア語が第２外国語と決められていたのには戸惑ったが、仕方がない。ロシア語の教科書を買いに行って、私はそこで初めてロシア語がキリル文字を使うことを知った。レーニンの著作を原書でと言っていても、実はロシア語について一切何も知らなかったのだから恥ずかしい。

そしてロシア語の講義がはじまると、私にはこの言語学習が難事であることをすぐに悟った。キリル文字は英語のアルファベットとは大きく異なり、一から記憶し、練習しなければならない。講義では単語と文法のテストが毎週あるから、予習と復習に長時間かかった。第 2 外国語は必修だから、ロシア語で 8 単位取らないと、卒業もできない。これはえらいことになった。革命を起こす前に私はロシア語と格闘するはめになり、しかもここで予想外の苦戦を強いられたのである。

1 年間、毎週のテストを生き残り、成績は優だった。しかし、私のロシア語力がレーニンを読めるレベルに達するには、少なくともあと 100 年は学習し続ける必要がありそうだった。他方で、ロシア語にささげたこの投資の果実が、第 2 外国語の単位だけなのでは悔しい。それで私は大きな決断をした。1983 年の夏休みに、私はソビエト連邦を旅行したのである。

読者はそもそもレーニンやソビエト連邦（ソ連）を知らないかもしれない。レーニンは革命家かつ哲学者であり、1917 年のロシア革命と 1922 年のソ連建国のときに主導的な役割を果たした。ソ連は、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカス[1]の 4 つの共和国が連合して建国され、第二次世界大戦中に東欧を侵略して領土を広げた。大戦後のソ連は、世界最大の軍事大国であり、アメリカ合衆国につぐ世界第 2 位の経済大国だった。先進の技術にも優れ、1961 年には世界で初めて有人の宇宙船を打ち上げ、1969 年にはアメリカについで月面着陸を成功させた。私が子供だった 1970 年ころまでは、まぎれなく世界最先端にある国だったのである。

情報統制が厳しく、ソ連の内情はほとんどわからなかったが、ともすれば過度な理想主義に陥りやすい高校生だった私には、それがかえってソ連を美化したといえる。私はそのようなソ連建国の父であるレーニンに対して畏敬の念を抱いていて、そもそもそれが私の革命家願望を醸成したのだった。そんなレーニンの国を見たいというのは長らくの願望だった。ロシア語への投資がこの願望を実行に向かわせたのだった。

学生なので時間はたっぷりある。ソ連に行くからには、シベリア鉄道に乗りたかった。そこで横浜から 2 泊 3 日の船旅でナホトカに行き、そこから列車でハバロフスクに移動して１泊、そしてハバロフスクから、途中イルクーツクでの 1 泊休憩観光を挟んで計 7 泊 8 日のシベリア鉄道の旅をした。私が初めてたどり着いたヨーロッパの都市は、シベリア鉄道の終点、モスクワだった。モスクワで 3 日過ごした後、当時のレニングラード（現在のセントペテルブルグ）と、バルト 3 国のタリンとリガを訪れた。その後、キエフ（キーウ）からヤルタを回った後、飛行機でモスクワを経由してハバロフスクまで戻り、また鉄路と船で横浜に戻った。全部で 40 日ほどの旅であった。

ソ連は私にとって初めての外国であった。今なら海外生活の様子はインターネット経由でたやすく垣間見ることができるが、当時は日本にいたらソ連市民の生活情報など何もわからない。予備知識がほとんどない状態でたどり着いたこの異国の地では、何を見ても新鮮だった。音も匂いも、日本とは全く別物だった。この旅行は 40 年前の出来事だが、いまだにこの目で確かめた様々な情景が脳裏に浮かぶ。

この旅で、私は様々な経験をし、ずいぶんと成長した。そしてこの旅は、考え方の大きな転換点となった。宇宙にロケットで人を送り、核兵器を山ほど持つ強国の一般生活が、驚くほどみすぼらしく、非効率的だったからである。

そもそも物がないのにびっくりした。スーパーマーケットのようなものはある。だが、日本のスーパーなら山積みになっているようなごく普通の生活必需品が、売られていなかったり品切れだったりするのである。運よく買いたいもの発見したら、それを売り場の店員に告げて確保してもらう。そして会計にいって、何を買いたいか係員に申告する。すると、わら半紙のできそこないのような紙に何やら書き込むので、代金を係員に払ってその紙と交換する。そしてその紙をもって売り場に戻り店員に渡すと、ようやく物資が受け取れるという仕組みだ。この間、店員も係員も何も話さず怒ったような表情をしているから、自分が何か重大犯罪を企てているような気になる。ソ連では、何をするにも怒ったような表情の人を何人か動かさざるを得ず、果てしなく時間がかかった。

---

[1] ザカフサスは現在のアゼルバイジャン、アルメニア、グルジアにあたる。

そして、物があっても、質が悪い。紙製品はその典型だった。ごわごわした出来損ないのわら半紙のようのものがどこでも使われていた。トイレットペーパーもおそらくこの紙を利用していて、ごわごわしている。鉄道の切符や航空券までこの紙だ。バスに乗ると、このわら半紙でできた切符らしきものが束ねてある。そのわきにある料金箱に代金を払って自分で1枚引きちぎる。この「切符販売機」は運転手からは見えない位置にあり、運転手も気にかけている様子はない。見ていると、料金を払う人は多くない。もっとも、あとで聞いたら市民なら定期券をもっているはずとのことだった。

ほとんど何も自動化・機械化されていない。自動販売機はほとんどなくて、あってもごく原始的なものである。たとえば、清涼飲料水の自販機にはコップが備え付けてあり、お金を入れると液体が出てくるのでこれをコップで受けて飲む。飲み終わったら、コップを洗って元の場所に戻しておく。日本の自販機に慣れていると、コインを入れれば紙コップがどこからか出てくると予想するのだが、すると液体だけでてきて流れて行ってしまう。無駄のないエコな仕組みを目指していたのではないのかと思うかもしれないが、要するに紙コップを自動的に出す技術がなかったのである。

百聞は一見に如かず。自分で見たソ連の現実の姿には、驚くほど説得力があった。何か本質的なところが、明らかに間違っている。それが何かはわからないが、少なくともソ連は憧れをもって目標とするべき国ではない。ナホトカからの帰りの船に乗り、1か月以上離れていた日本の放送を受信しようと、持参のラジオのスイッチを入れたころには、私のレーニン熱も革命願望も消えていた。

ソビエト連邦経済は、1980年代に入ると深刻な不況におちいっていた。私が旅をしたころは、その入り口にあたる時期だったのだろう。1991年にソビエト連邦は崩壊して消滅した。

さて、この旅行では様々な興味深いことがあったがとても書ききれないので、ひとつだけ書いておく。モスクワからレニングラードへは夜行列車に乗って移動したが、この列車に財布をおきわすれてしまった。現在海外に出かける時よりもはるかに用意周到であった私は、パスポートやトラベラーズチェックをはじめ大切なものにすべて腹巻にいれていた。そして財布の中にはとりあえず使うつもりの約3万円相当の現金しか入れていなかった。旅行の続けるに支障はなかったので、まああきらめるしかないと自分に言い聞かせたものだが、翌日エルミタージュ美術館に出かける際、ホテルのフロントに鍵をあずけに行ったら、財布をおとしたでしょうと言われた。指示されるままに近くの警察に行くと、確かに見おぼえのある財布が届いている。支障はなかったとはいえ3万円は当時の私には大金だったので、もどってきたのはたいへんうれしかった。しかし後で考えると、現金以外に何もはいっていなかった財布がどうして届いたのか。監視されていたようで、いまだに気持ちが悪い。